
colors † (クロス)

空太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

colors†（クロス）

【Nコード】

N3306R

【作者名】

空太

【あらすじ】

俺、柏木 かしわぎ 公大 きみひろ には相馬 そうま 詩鶴 しじ という彼女がいる。

でも、俺は心のどこかで、幼なじみの稲生 いのう 玲菜 れいな の事を思っていた。それが届かない想いだという事は、わかっていたのに。

——原作の中では語られなかった、公大と玲奈の起こした騒動をテーマにした小説です。時系列的には、芳文と美緒が付き合い始めて二カ月後です。

——原作 t e n † c r o s s 「 c o l o r s 」

公大の悩み

「はあ……」

初夏の風の中、一人ため息をつく。

——俺、柏木^{かしわぎ} 公大^{きみひろ}には彼女がいる。ひいき目を抜いても美人の部類だろう。俺には勿体無いくらいだ。でも、俺の心の中にいるのは何時だってあいつ——稲生^{いのう} 玲菜^{れいな}——だ。

あいつとは付き合いが長い。なにせ幼稚園からの幼なじみだ、あいつの事は誰よりもわかるつもりだ。今まで何度あいつに振り回されたことが。

今でも、俺達の立ち位置は変わっていない。変えたいと思った事もある、あいつにとつて特別な一人になりたいと思つた事もある。でもあいつは俺を恋愛対象として見る事は出来ない。その事をずっと悩んでいる事を、俺は知っていた。だから、気付かないフリをするしかなかった。

そんな関係が続いて数年、俺達は互いに超えられない壁を作り上げ、いつもど通りの立ち位置を守っていた。そんな時に彼女——相馬^{そうま} 詩鶴^{あしづ}——に告白された。

詩鶴は電光石火のように現れて、いきなり「付き合いってください」と頼まれた。しかも次の日には付き合い合っているという話が玲奈にまで聞こえていた。大胆で、強引な彼女に断る事も出来ずに、付き合い事になってしまった。

一体、俺はどうしたらいいんだか。

動き始めた歯車

「公大ー、そろそろ起きなさいっ。」

次の日、隣に住む玲菜に起こされて俺の一日が始まった。

学校の準備を終えて家を出て、門の前にいた玲菜と歩き始めた。

「おはよう、公大」

「ああ、おはよう。」

少し欠伸を抑えながら返事をした。

「また考え事？ここのところ毎日じゃない。」

「ああ、ちよつとな…」

付き合いが長いせいで、玲菜には隠せなかったようだ。しかし玲菜の事を考えて寝不足だなんて言えない。

「彼女とは上手くいつてないの？」

「詩鶴は嫉妬が酷いけど、まあそれなりに仲はいいぞ。」

「ふうん…彼女美人みたいだしね、一度ゆっくりと話をしてみたいんだけど…」

「それはダメ。」

「ちょっとー、なんで即答なのよー？」

「いらんちよっかいかけるか、もしくは迷惑をかけるからだ。」

「失礼ね。彼女には何もしないわよ。」

「その言葉が信用出来ん。今まで何回聞いたことが。」

「しょうがないじゃない。可愛い子は放っておけないんだもん。」

その一言に俺はため息をつく。

——なにを言っても無駄だとわかってはいるけど、こいつの趣向は変わらないな、本当。

そう、この俺の隣にいる幼なじみは男に興味を示さない。興味があるのは女の子の事だけだ。

玲菜は美人だ。間違はなく詩鶴より美人だ。ツヤのある髪といい、整った顔といい、豊満な体つきといい（一応、俺も一高校生なので意識してしまう）、男を惹きつける魅力的な女だ。頭もいいし（学年主席クラス）、モテる。しかし、その視線と興味が向けられているのは女の子だけだ。

そんな彼女に俺は好意を向けられている。その事だけはわかる。それこそ長い付き合いだから、お互いわかっている。でもその理由は少なからず俺の顔立ちのせいでもあると考えると、複雑だけど。

そんな事を考えている内に学校に着いた。俺と玲奈のクラスは違うから、玲奈は自分の教室に向かった。

教室に入ると、上ヶ崎に声をかけられた。

「よお、柏木。今日も幼なじみと仲良く登校か？」

「別にそんなんじゃないよ。」

「またまた、あんな美人と幼なじみってだけでも羨ましいぜ。」

「あいつの性格を考えてみる。俺なんか問題外だろ。」

「まあ、それもそうだな。」

この学校では、校内ゴシップの大半は玲菜の起こした事件だから、生徒のほとんどは玲菜の性格を知っている。

「でもお前モテるからなあ。羨ましいぜ、本当によ。」

「お前にはわかんねえよ。俺の気持ちは。」

——そういう事は、一度味わってから言うて欲しいね、まったく

先生が来たので、話は打ち切りになった。

——放課後。携帯を開くとメールが七件。全て詩鶴からだった。内容はほとんど同じで、

「一緒に買い物に行きたいから、付き合って。駅前で待ってる」というものだった。

なんで五分間に七回もメールするのかわからない。女の子ってこういうものなのか？しかも最後のメールには「遅刻したら許さない」と書かれていた。あいつの嫉妬深さは、正直息が詰まる。画面を見ながら、廊下を歩いていると、

「そこにいるのは柏木君じゃないですか。そんな所でため息なんかついてどうしたんだ？恋煩いってやつですかねー。」

「おわっ！？……なんだ堀内か、脅かすなよ。」

俺の横にいるのは、堀内^{ほりうち} 孝信^{たかのぶ}。自他共に認める社交的な変人だ。こいつから聞いた武勇伝の数は、両手両足の指では足りない。でも、友達思いなやつで、周りからの信頼も厚い。背が高くて体つきもいいから、力仕事を手伝う姿をよく見る。うらやましい限りだ。

「まあ、公大が悩むなんて、大方玲菜さんが自分の顔立ちの事だろ？そんなに悩んでもしょうがないんじゃないか？」

「違う！彼女の事だ！そっちじゃねえっ！」

今堀内が言った通り、俺は自分の顔立ちがあまり好きになれない。このくつきりとした小さめの鼻や柔らかい髪、雰囲気、身長の高さなどの理由で、俺は女の子っぽいとよく言われている。女の子に「可愛い」と言われても、まったく嬉しくない。むしろつらい。学校祭などでちょっと女装したら、クラスの女子にため息をつかれた。そのせいか、女子と話す機会も多く、城ヶ崎のようにクラスの男子からはうらやましそうに見られる。——まあ、彼女である詩鶴も、俺が可愛いから一目惚れしたらしいけど。

しかし今日の悩みは、詩鶴についてだ。無関係ではないけど。

「あー詩鶴ちゃんって言ったつけ、お前の彼女？付き合っているからこその悩みですなあ。あーあ、なんで俺の周りには彼女持ちが多いのかねえ？」

「堀内にもそのうち出来るだろ……ところで堀内、今日は誰と遊びに行くとか言ってなかったか？」

本来、三年生の俺達は遊べる時間などあまりないが、こいつにはど

こ吹く風だ。まったく気にしてない。

「それがさー、久しぶりに川相かわいと遊ぶつもりだったのに、あいつ悪い。先約があるから。」って図書室に行っちゃったんだよー。」

その名前は聞いたことがある。堀内の中学からの知り合いで、少し前までふさぎ込んでいたらしいが、最近明るくなったと言っていた気がする。あと、クラスの女子が「しまパンマニアの変態」とか言ってた気がする。

「なんで図書室なんだ？」

「あいつは彼女と一緒に勉強するんだろうよ。ほら、聞いた事あるだろ？保健室、もしくは図書室の女王と呼ばれていた、高砂たかさこ 美緒みおっていう女の子の事。その子が川相の彼女なんだよ。」

「ああ、彼女か。」

その名前は有名だ。成績優秀で、しかも美人。でも、他人には絶対零度で接する保健室（図書室）の女王。それがここ二カ月ほどで大きく変化した。眼鏡をやめてコンタクトにしたり、人当たりもよくなっただけで、連日人気急上昇中らしい。彼氏が出来た事で変わったという話が俺のクラスにも伝わっていた。

「へえ、高砂さんの彼氏って堀内の知り合いだったのか。」

「本当に仲がいいんだよ、あの二人。周りがあてられてるほどにな。俺が入り込む場所なんてなくてな。…まあ、そういう訳で、フリーの俺は今日も一人寂しく過ごしますよ…」

「まあ、そのうちいい事あるさ。」

「おう！潤った高校生活を探しにいくぜ！じゃあな、柏木。」

そう言つて、堀内は走り去って行つた。なんで毎日あんなに元気なんだろうな、本当。

なんて考えていたら、待ち合わせの時間まであと十分。これはまずい。遅刻したら、何をされるか分かったものじゃない。俺は駅前に向かつて走り始めた。

学校から走つて来たおげで、なんとか間に合いそうだ。少しペースダウンして歩いていると、

「あら、公大じゃない。どうしたの、こんなところで？」

という声が聞こえた。振り返ると、買い物袋を下げた玲菜がいた。なぜか機嫌がよさそうだ。

「お、お前こそ何でこんなところにいるんだよ？部活はどうしたんだよ？」

玲菜は一応、地歴部の部長だ。一応という理由は、部員の大半が幽霊部員で、部室に顔を出す事なんてほとんどないからだ。

「見てわかんない？買い物よ、買い物。ちょっと参考書と化粧品をね。公大こそ何してるのよ？」

「えーと、それは…」

まずい。今本当の理由を言えば、こいつは確実に詩鶴に手を出す。

でも、どうやってごまかす？付き合いが長い分、隠し事はしにくい。

「お、俺も買い物だよっ！」

「ふうん…」

上手くごまかせたのだろうか、玲奈は何も聞かなかった。

「まあいいわ。そんな事よりもさ、聞いてよ公大。」

「何だ？」

「ついに美術部の唯ちゃんゆいと付き合う事になったのーっ！」

「ああ、それで上機嫌なのか。」

「あ、やっぱりわかつちゃう？」

「自分は幸せですって顔に書いてあるぞ。…この前弓道部の深見さんと別れた時とは大違いだよ。」

こいつと付き合った女の子の数は数えきれない。だけど、そういう女の子たちは、吊り橋効果のような衝動で付き合いってしまう子がほとんどだ。だから長続きしない。深見さんとは比較的長い付き合いだったから、けっこう落ち込んでいた。あの時の玲奈は、フオローするのが大変だった。

「いいじゃない、可愛い子は多いんだから。」

「はあ…、変わらないな、お前は。…ところで玲菜、学校祭の準備

の方はどうだ？」

「看板の展示もなんとかかなりそうだし、あとは人手かな……」

そういふなり、玲菜はチラツと俺を上目遣いで見てきた。

地歴部は玲菜が活動しなければなくなってしまう。だから、学校祭の時には先生方に活動しているところを見せる必要がある。

しかし、いくら玲菜が頑張っても、限界はある。そこで毎年、美術部に看板を書いてもらっている。しかし、それでも人手が足りないから、俺という手伝いが必要だったりする。けっこうハードだから、玲菜一人にやらせるわけにはいかない。

「どうせ暇だし、今年も手伝ってやるよ。」

「毎年ありがとうね、公大。じゃあね。」

——その笑顔は反則だろ。だから、あきらめきれないんだよ。——
歩いて行く玲奈を見ながら、そう思った。

駅前に着いたのは、指定された時間より十五分程遅れていた。探してみても詩鶴は見当たらなかった。連絡もつかないし、どうやら待ちきれなくて帰ってしまったようなので、俺も帰る事にした。ああ、何を言われるやら。

——この時はまだ思いもしなかった。詩鶴が帰った理由は、もつと別にあつたなんて。

嵐の始まり

「公大ー、起きなさい。」

次の日、玲菜に起こされて一日が始まる。あくび混じりで

「おはよう。」と言うと、

「おはよう、公大。」と返される。

その声はいつもよりやや高い。新しい彼女が出来たからだろう。こういう時の玲菜の目は輝いていて、止めるのが難しい。

——ここでくぎをさしておくか——そう思い、隣で鼻歌混じりで歩いて玲菜に話しかける。

「今更付き合うとかは言わないが、少しは隠せないのか？お前、顔に出過ぎ。」

「だって…あの唯ちゃんよ。成績優秀、容姿端麗の美術部の部長よ？これが落ち着いていられる訳ないでしょう？」

「はいはい、何をを言っても無駄だったな。」

——この万年発情期女が。——そう言ったところで直らないものは直らないので、俺は諦めた。

——昼休み。俺は堀内や上ヶ崎、山本と話していた。でも、内容をほとんど頭に入ってたなかった。

「どうした、柏木？上の空じゃねえか？」

「あ…ああ、悪い。詩鶴の事でちよつとな…」

「大変ですなー公大君は。二人の美人に囲まれているっていうのは、うらやましい限りですよ。」

「うるさいぞ、堀内。詩鶴の嫉妬は息苦しいし、玲菜はトラブルばっか起こすし、結構しんどいんだよ、こっちは。」

「それはノロケにしか聞こえないぞ。」

「ほっとけ、山本。大体お前は彼女がいるだろうが。そっちに行けよ。」

山本の彼女は深見^{ふかみ}衣里^{えり}、玲菜と三ヶ月ほど前に別れた女の子だ。彼女と別れた時の玲菜は、本当に落ち込んでいて、元に戻るまで散々な目に合ったから忘れられない。

「いやだよ。こんな公大を見れる機会なんてめったにないしな。」

——なんで俺の友達はこんなのか。——なんて考えていると、

「んで、詩鶴ちゃんがどうしたんだ？」

と堀内に本題に戻された。

「実は、昨日待ち合わせ場所に行ったけど、どこにもいなかったんだよ、あいつ。連絡もとれないし…、まあ、十分以上遅れたからか

もしれないけど。」

「おいおい、それはお前が悪いだろ。女の子を待たせるのは感心しないぞ。」

「一体、仕返しに何をされるんだか…」

——ああ、なんで俺は、詩鶴と付き合っているんだろうか——俺の脳裏に詩鶴との出会いがよぎる…

——半年前、俺は相馬詩鶴と出会った。それまで、俺は相馬 詩鶴なんて女の子の事は知らなかった。学校も違うし、俺は部活にも入ってないから（周りからは地歴部員と言われてる）、知り合うキツカケもなかった。

その日、詩鶴は俺の家の前に現れた。身長は155cmぐらいの、柔らかそうな長い黒髪、つるんとした唇、整った眉をしている女の子だった。そして、開口一番こう言った。

「初めまして、相馬 千鶴です！あなたの事が好きです！私と付き合ってください！！」

「はい…？」

その時、俺は何が起こったのか分からなかった。分からない事が多すぎた。それでも、一つだけまったく分からない。

「…一つ聞いてもいいかな？」

「何？」

「なんで俺なんだ？」

そう、その一つだけ分からない。俺は性格がいいわけでもないし、口も悪い。この女の子と話した事もない。それなのにいきなり告白されても困る。

「一目惚れです！学校祭であなたを見かけた時から好きです！……じやあ、私はこれで。」

そう言つて、相馬さんは歩いて去つて行つた。その姿が見えなくなつてから、俺は一人ため息をついた。——はあ、またか。多いんだよな、こういう事。——

俺はこんな顔立ちのせいかな、女の子から告白される事がある。しかし、そんな事されても全く嬉しくない。女の子に可愛いとか言われてもつらいだけだし、そういう子は大半が外見しか見ていない。はつきり言つて迷惑だ。

それに、本気で好きになられても、俺はその気持ちに答える事が出来ない。俺の中にある、玲菜への気持ちが消せないから。だから、誰とも付き合わない、玲菜の側に居ればいい、そう思っていた。

——次の日、目覚まし時計に起こされて、俺の一日が始まつた。いつもなら玲菜が起こしてくれるけど、あいつは、

「今夜は衣里ちゃんと過ごすから！」と目を輝かせて去つて行つたからからない。

——止めるべきだったのだろうか？——なんて思いながら、俺は一人で学校に行った。

学校に着くとすぐに堀内が走つて俺の前に来た。

「朝から元気だなー、堀内。何かあったのか？」

「ああ、あったさ。」

その口元はニヤついている。——なんだ、彼女でも出来たのか？——なんて考えてた俺に、堀内はとんでもない話を始めた。

「いやー、お前に彼女が出来たって聞いてな。これは祝ってやらなきゃなーと思つてここに来たんだよ。」

「は？どういう冗談だよ、それ？」

「いやー、水くさいよなー、公大も。彼女が出来たんなら、俺に教えてくれても良かっただろー？」

「ちょっと待て、堀内。俺が誰と付き合っているって？」

「またまたー、とぼけるなよ、公大。相馬 千鶴ちゃんだろ。」

「はああっ!？」

「いやー、本当うらやましいね、あんな可愛い彼女がいるなんて。まあ、おめでとう。」

そう言つて、堀内は笑いながら去つて行つた。俺はといえば、開いた口が塞がらなかった。深見さん（同じクラス）に聞いてみると、この話は学年中に広がっているらしく、玲菜も知っているらしい。

「まあ、否定は無理ね。諦めなよ。」とキツパリと言われた。

こうして、強制的に俺は相馬 千鶴という女の子と付き合う事になった。――

そこまで思い出して、ふと思う。――何で俺は、毎日振り回されてるんだろうな、本当。刺激が強すぎる。もう少し穏やかに過ごしてみたいな、全く。――と。

――放課後。なにやらいつもより騒がしい。上ヶ崎曰わく、校門前はかなり可愛い他校の女の子がいるらしい。

――まあ、俺には関係ないか。――なんて考えていた俺は後悔する事になる。なぜなら、校門にいたのは俺の彼女――相馬 千鶴――だったのだから。

喧嘩（前書き）

更新が遅れました。誠にすみませんでした。

喧嘩

「あら、遅かったじゃない、公大。」

詩鶴が俺を睨み付けながら言う。どうやら相当ご立腹らしい。

「ああ、昨日の事は悪かったよ。十分以上も遅れて…」

「そんな事はどうでもいいのっ！とにかく来なさい！！」

そう言っで、詩鶴はどこかに向かって歩き始めた。俺の横にいる上ヶ崎はにやけが抑えられないようだ。

「あーあ、彼女怒らせちゃったな、公大。まあ頑張れよ。」と、俺の肩を叩く。

「黙れ、上ヶ崎。」

——なんで悪い予感だけ当たるかな、本当。——そう思いながら、俺は詩鶴を追いかけた。

——数分後、俺と詩鶴は近くの公園にいた。ベンチに腰掛けると、詩鶴が切り出した。

「さあ、聞かせて貰いましょうか公大。言っておくけど、逃げようなんて考えないでよね。」

「今更、そんな事しないよ。大体、逃げてもお前は追ってくるだろうが。」

「まあね。よく分かつてるじゃない。」

「半年も付き合えば嫌でも分かるよ、お前の嫉妬深さは。」

こいつの嫉妬深さは半端じゃない。今まで何人の女の子がこいつに泣かされた事が。

「本当に一言多いよね、公大。」

「何を今更、諦めろよ。お前の彼氏はこんな男だよ。」

「それもそうね。…さて、そろそろ本題に入らせてもらっわ…昨日、何してたのよ?」

——やっぱりそこか。さて、今回はどうごまかしたらいいかな…

「な、何って…別に。ちょっと堀内と話してたら、時間を忘れてたんだよ。」

——詩鶴は堀内の事を知ってるから、これで大丈夫だろう。

「ふうん…、本当に?」

「あ、ああ、本当だ。」

「へえ…堀内君ねえ…」

何か含みがちな言い方が気になるが、とりあえずごまかせたよう

だ。もつとも、俺は嘘はついていない。理由はそれだけではないけど。

「じゃあ、一つ聞いてもいい？」

「何だ？」

「昨日、公大と楽しそうに話していた女について。」

「はい？」

俺は自分の耳を疑った。

「あれは一体どこの誰よ？随分と楽しそうにしていたけど！？知り合いつてレベルじゃなかったわよねえ！？」

聞き間違いではないようだ。詩鶴は間違いない玲菜の事を話している。

「ちょっと待て！何でお前がそんな事知ってるんだよ？」

あそこで玲菜に会ったなんて事は、誰にも言っていない。なのに、どうして詩鶴が知っているんだ？

「決まってるでしょう！？公大とその女が楽しげに話しているのを、目の前で見せつけられたからよ！！」

詩鶴の怒鳴り声が俺に響く。

「…人の話を盗み聞きしてんじゃないやねえよ。」

俺はそれしか言えなかった。

「浮気するよりましでしょう！？はぐらかさないで、さっさと答えなさいよ！あの女はこの誰で、どういう関係なのよっ！！」

詩鶴は俺の目を睨み続けている。その顔には、「話してもらうまで、てこでも動かない」と書かれている。どうやらはぐらかす事を諦めるしかないようだ。しかたなく、俺は玲菜の事を話す事にした。

「あいつは俺の幼なじみの、稲生 玲菜だ。幼なじみとは言っても、恋愛感情はないよ。だから、浮気なんてしてねえよ。」

——最近、俺は嘘をつく事が増えている気がする。玲菜にも、詩鶴にも、俺自身にも。

ただの幼なじみなら、俺は玲菜といるわけがない。物心ついた頃から一緒にいる玲奈の事が、俺は好きだ。その気持ちに嘘はない。

——それにしても、「浮気」なんて言葉よく言えるな、詩鶴。半年前、人の話しも聞かずに付き合ってるなんてデマを広めて無理矢理付き合う事にしたお前がよく言うよ。

俺の周りの女子を傷つけてまで、俺を手に入れようとしているお前が。

「幼なじみ？嘘、そんな女がいるなんて、一言も言っただけじゃない！なんで隠してたのよ！？」

「もし言ったら！…お前は俺から玲菜を遠ざけるよな？」

「もちろんよ。公大が見る女は私一人で十分なの。邪魔なものは全て消すわっ！！」

——やっぱりそうか。

「だからだよ、お前に教えなかったのは。…お前は行動が極端過ぎるんだよ。何人俺の友達が減ったことか。」

「それは公大が悪いんでしょ！？今までだってはぐらかしてばかりで！彼女の事より、その女の方が大事だっていうの！？」

「俺の気持ちを考えてないのはお前だろ！勝手にデマを広めて、俺の友達を傷つけて、そこまでして俺が欲しいのかよ！」

詩鶴は答えない。俺はさらに続ける。

「何でも自分の思い通りになると思うな。俺はお前の物じゃないんだ、これ以上おれの友達を傷つけるな。…じゃあな。」

それだけ言って、俺は公園を後にした。さすがにあれだけ言うっておけば詩鶴も大人しくなるだろう。そう思っていた、この時は。

詩鶴の策略

詩鶴と言い争ってから一週間。あれから詩鶴とは一度も連絡をとってない。ハッキリ言って、これは異常だ。

少なくとも、俺の知っている相馬 詩鶴という女は、あれだけの会話で説得出来る女ではないし、自分の生き方を変えるはずはない。この半年間でイヤというほど見てきた詩鶴は、そんなに弱い女ではなかった。あいつは自分の欲しい物は何をしてでも手に入れる、そういう女だ。…何か嫌な予感がする。何も起こらなければいいが…

昼休み、地歴部室（第二美術室）に顔を出すと、一人で弁当を広げている玲奈がいた。

「ああ、公大」と声をかけてきたその声には、いつもの明るさがない。黙々と箸を進めている。俺は隣に腰を落として話すことにした。

「なんだよ、辛気臭い顔して。何かあったのか？」

「……れた…」

「何だって？」

「だから！振られたの！唯ちゃんに！」

「はあ！」

おい、ちょっと待て。それは色々とおかしいだろ？付き合い始めて約二週間だろ！？

「おい、まさかお前、二股でもしてたのか？」

「そんな事するわけ無いでしょ！？あんな可愛くて娘と付き合って、二股かける訳無いでしょ！？」

「じゃあ、何で振られたんだよ？」

玲奈の噂を知っていて、それでも付き合ってくれた女の子だ。よほどの理由があるはずだ。

「それがよくわからないのよ……」

「は……？」

「朝突然やって来て、「あなたへの想いは勘違いでした。これから違う人を見つけて付き合ってください。」だって……」

「ふーん……あの相原さんがねえ……」

——正直言って、あまり納得いかない。玲奈の振られ方はいつもそんな感じだけど、二週間は短すぎる。それにこのタイミングで起こったなんて偶然、信じがたい。

「何か最近どこに行っても視線を感じるし、私何かやったかしら……」

その言葉で自分の中の疑惑が確信に変わった。——詩鶴だ。こんな事するのはアイツしかいない。この一件は確実に詩鶴が介入している。この一週間詩鶴が連絡してこなかった理由は、玲奈の事を監視していたからに違いない。

「…大。公大―」

忘れてた。詩鶴は物事をハッキリと決める決断力と、思いたった
らすぐ実行する行動力がある事を。

「公大ってば―」

玲奈の事がバレた時点で気付くべきだった。自分の甘さに自己嫌
悪する。

「…公大、私のバストは？」

「92のG…っ痛っ！」

玲奈のデコピンを食らった

「何でそこだけ答えちゃうかなー、しかも合ってるし。まったく、
このおっぱい星人は。彼女のじゃ足りないの？」

「うるせえ。男子で嫌いな奴何て居るわけねえだろ！」

「まあ、そんな事はともかく。公大、あんたの彼女を紹介しなさい
よ。」

「ダメだ。」

「別にあんたの彼女を奪うつもりはないわ。ただ合ってみただけ。
かわいい子を見るだけでも目の保養になるし。」

「ダメだ。」

「ちよつとー、いいじゃない。減るもんじゃないんだし。それとも、独占欲？」

「そんなんじゃないよっ！」

矢継ぎ早に聞いてくる玲奈に、八つ当たりしてしまった。

「…悪い。でも、詩鶴には関わって欲しくないんだ…。きっとアイツは俺と親しいお前を傷つける。そんなのは見たくないんだ。」

すでに手遅れなのかもしれない。でもこれ以上玲奈の傷つくのは見たくない。俺の所為で好きな子をなかしたくない。

「邪魔したな、俺はそろそろいくぞ…」

そう言っ、玲奈を残して俺は部室を後にした。

——放課後。俺は詩鶴に連絡を取った。取ろうとした。しかし、いくら掛けてみても繋がらない。こちらから掛けたら必ず出る奴だったのに、まったく繋がらない。詩鶴の家に行けば話ができないどころか、相馬家に取り込まれるだろう。相馬家は代々続く名家だ、逆らうことは難しい。詩鶴の両親からは氣に入られているから、なおさら行けない。

それでも、玲奈を傷つけたくなかったから、俺は電話を掛け続けた。詩鶴が出てくれる事を祈りながら。

——家の前を見ると、公大の見知った顔がいた。背は公大より少し小さい、長い黒髪の女子高生が、公大を見つめていた。

急いで捕まえようとしたが、見失った。

そして俺の携帯に一通のメールが届く。

そのメールにはこうかかれていた。

——私を裏切った事を後悔させてあげる。——と。

隠せぬ想い

次の朝。結局何も出来ずに一日が経過した。

「公大、また考え事？」

「ああ、ちよつと…」

「お互い悩みがあつて大変ねー」

いつもなら、玲奈に相談すれば大抵の事は片付く。この出来過ぎた幼馴染は、行動力もあるから。しかし、今回だけは頼れない。

城ヶ崎達も巻き込みたくはない。これは俺の甘さが引き起こした問題なんだから。でも、情報が足りない。気がすまないけど、俺は三組に行く事にした。

「まあ、出来ないもないぞ。」

堀内はこの学年では顔が広い。玲奈の周囲に関する情報を集めるのも簡単だろう。

「…悪いな、巻き込んでしまった。」

「気にするな。面白い事に首つつこむのは慣れてるって。一人で抱え込むより、相談してくれた方が嬉しいぞ、俺は。」

そう言つて、堀内は快く引き受けてくれた。

——玲奈は日に日に無口になり、何かを考え込んでいた。独り言

も多くなり、部室にも顔を出さなくなった。話し掛けようとしても上手く捕まらない。どうやら俺に会うのを避けているようだ。

自分なりに探ろうとしてみたが、有力な情報は無く、堀内に期待する事しか出来なかった。

——そんな時に、事件は起こった。

玲奈が階段で背中を押されて、俺の前に倒れ込んだ。上手く受け止めれたから良かったものの、下手したら頭を打ちかねない程危なかった。

階段の上を見上げて、そこには誰もいなかった。

「おい、玲奈！無事か？」

「平気よ、この位。自分で立てっ…！？」

「足挫いてんのに無理すんじゃないよ。ほら捕まれ、保健室運ぶから」

玲奈をおんぶして、俺は保健室に向けて歩き出した。

「ありがと、公大…」

背中から聞こえる玲奈の声には、いつもの明るさはなく、弱った猫のように小さかった。

——保健室にて——

「捻挫ね。二、三日は家で安静にする事。」

「分かりました」

「私は親御さんに連絡するから、ベッドで寝てなさい…柏木君は稲生さんの事をみてあげて」

「はい」

保健教諭の山本先生がいなくなり、保健室には俺と玲奈だけが残された。

「…やっと話せるな。」

「…別にあんたに話す事なんて無いわよ…」

「隠すなよ。日に日に独り言が多くなるし、部室にも顔を出さないし、ここ三日間ずっと俺を避けてたじゃねえか。お前は理由もなくこんな事するやつじゃない、そうだろ？」

「…本当に何でも分かっちゃうのね、公大」

「何を今更。何年お前と一緒にいると思ってるんだよ？」

「それもそうね。…分かったわ。全部話すわよ、ここ二週間で感じた違和感を。」

そう言って、玲奈は話し始めた。

「まず始めに、ここ二週間、学校の外にいる時ずっと誰かの視線を感じたわ」

—— 今から二週間前。つまり、俺と詩鶴が口論した日だ。

「そしてこの一週間、ずっと私の噂が流れてる。」

「どんな？」

「稲生 玲奈は同性愛者だ。」っていう噂。」

「…嘘だろ？」

「ここで嘘を言ってもしょうがないでしょ。本当よ。しかも学校中に広まってるらしいわ。…まあ、事実だし、否定出来ないでいたら、どんどん広まって、一週間嫌がらせを受け続けて、現在の状況に至るわ。まったく誰なのかしら、こんな事するのは。」

——俺は握り締めた拳がおかしくなりそうなほど握り締めた。

想像以上に酷い仕打ちだ。この手の噂は忘れてられず、人の記憶の中に残る。つまり、玲奈は卒業するまで偏見で見られ続ける事になる。嫌がらせも止まる事がなく続くだろう。

そこまでする必要があるのか。玲奈が詩鶴に何をした。そこまですて欲しいのか、俺が。

「私を突き飛ばしたのは、三年の男子だと思うわ。どこかで見覚えがあったから。私に分かるのはそれだけよ…」

今日ほど自分の事を殴りつけたくなかった日はない。自分の甘さで好きな子をここまで傷つけてしまっていた事を、今になって痛感した。

「どうしたのよ、公大、さっきから黙っちゃって…」

「ごめん、玲奈。」

「なんで公大が謝るのよ？」

「俺の所為なんだ。」

「なにが」

「全部だ。相原さんと別れたのも、お前が嫌がらせを受けてるのも全部俺の所為なんだ」

嫌がらせを実行したのは詩鶴でも、原因は俺の甘さと不甲斐なさだ。

「俺がちゃんとしてればこんな事にはならなかった。詩鶴も道を間違えたりしなかった。」

「公大、何を言ってるの？」

「許してくれ、なんて言わないから。ただ聞いてくれ。」

そして俺は、玲奈に吐き出した。――届かない想いを。

「好きだ。」

そう言って、俺は玲奈を抱きしめた。

告白と決意

「い、いきなり何してんのよ、公大…。あんたには立派な彼女がいるでしょ？こんな同性愛者の事なんて放っておけばいいでしょ…。なのになんで…なんで今、優しくするのよ…」

玲奈の声には戸惑いと震えが混じっている。

「放っておけるかよっ！俺の所為でこんなに傷ついてるお前を、放っておける訳ないだろっ！！」

玲菜を抱く両腕に力をこめる。

「だ、大体、何であんたの所為になるのよ。ここ数日あんたの事を避けてたのに、何であんたに関係があるのよ？」

「…俺の所為なんだ」

「何が」

「全部だ。お前がケガしてるのも、陰口言われてるのも、全部、詩鶴を止められなかった俺の所為なんだよ」

「じゃあ、この二週間の事はあんたの彼女が原因だって言うの？」

「ああ。一週間前、アイツは俺に宣戦布告してきた。間違いない。」

「彼女とは、会った事も無ければ、顔も知らないのよ！？何であたしに嫌がらせしてくるのよ？」

「会った事はない、俺が会わせないようにしてたからな。……だけど、直接会った事は無くても、詩鶴は見たんだ、俺達の事を」

「…何時よ」

「二週間前だ。俺とお前が駅前で話してた所を、詩鶴に見られたんだ」

——なんであの時気付かなかったんだ、俺は。詩鶴が、自分から言い出した約束^{デート}を破る筈がない事に。まったく、今まで何を見てきたんだ、俺は。

「次の日に詩鶴と言い争って、俺はお前の名前を詩鶴に話しちまった。その時、俺は詩鶴とは別れたつもりだったんだ。詩鶴に玲菜が傷つけられるのが、耐えられないから。」

そう思ってたのに、何で俺は玲菜をこんな目に合わせてるんだろうか。

「…ねえ、教えてよ。何であんたは相馬さんから私を遠ざけたがるのよ…？あんたの彼女は相馬さんでしょ？私じゃないわ。なのに、どうして、私をかばうのよ……」

「……薄々気付いてたんだろ、お前。俺が詩鶴の事を話す時、別のやつの事を比べてた事に」

「知らないわ。知らないわよ、そんな事。」

「俺は詩鶴と付き合いながら、お前の事を考えてた。ずっと前から、

玲奈が好きだった。でも、伝える事は出来なかった。お前が俺を好きになる事がない事が分かってたから」

玲奈の気持ちだが、俺に向かない事は、ずっと前から分かっていた。

「だから、俺は詩鶴とも付き合ってみたんだ。別の女の子と付き合ってみれば、お前の事を忘れられると思ってな」

今になって気付いた。俺は詩鶴とも噂を流された時、抵抗しなかった。詩鶴を利用して、玲奈への想いを隠してただけだ。

「でも、もう駄目なんだよ。詩鶴は玲奈の代わりにはなれない。俺が好きなのは詩鶴じゃない。俺が好きなのは玲奈だ。」

「もうやめて！……やめて公大…これ以上聞きたくないわ……」

「それは無理だ。」

嗚咽混じりの玲奈の声が辛くても、ここでやめる訳にはいかない。

「こんな事になったのは俺の所為だ。でも俺は……これ以上苦しむお前を見たくない。だから、返事だけはしないでくれ。嫌ってくれて構わないから。好きになれなんて言わないから。」

そつと玲奈を抱いていた腕を離して、ベッドに寝かせる。

「どこに行くのよ？」

「相馬家に。ケジメをつけるためにな。」

「……無理しないで早く直せよ。」

そう言い残して、俺は保健室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3306r/>

colors†(クロス)

2011年10月8日12時25分発行